

望夫雲傳承

(13) 傅光宇、何永福「〈望夫雲〉与“望夫”情結」『思想戰線』一
九九二年二期 四四—五一頁

えられる。

本稿では、漢籍文献にみられる「望夫雲」と「望夫」モチーフ、華南に伝承される「孟姜女」説話を中心に、「望夫雲」の成立時期を検討した。今後は、南詔王の子弟が遊学した四川の状況、明初白族地区で活躍した文人たち等について研究を加え、「望夫雲」の成立時期とその発展について、引き続き検討を加えたい。

謝 辞

漢籍文献の解釈について、中央民族大学李徳龍助教より懇切丁寧なご指導をいただいた。心よりお礼申し上げます。

注

- (1) 『雲南辞典』によれば、『大理府志』には、①明蔡紹科修、楊士雲、李元陽纂、嘉靖五年(一五二六)刊②明李元陽纂修、万曆五年(一五七七)刊③清傅天祥修、黄元治、張泰交纂、康熙三三年(一六九四)(これは『重印大理府志』とも呼ばれている)の三種があるとされる。本稿は、東洋文庫蔵の李元陽纂、嘉靖四二年刊本に基づいた。
- (2) 張魯、李讚緒氏の説
- (3) 白鳥芳郎氏や木芹氏の研究によれば、『南詔野史』には数種の流伝本がある。木芹会証『南詔野史会証』によれば、南京図書館蔵倪輅本鈔本、淡生堂鈔本、環碧山房鈔本、『雲南備徴志』本、方臘仙蔵鈔本甲、乙、胡尉増訂本、丁疎仁本、胡尉道光刻本、清逸名校鈔本、施徳雲鈔本、始めと終わりの欠けた鈔本の一二種の版本を数えるという。本稿では『南詔野史会証』一三

二頁にもとづいて日本語訳を行い、同時に、東洋文庫蔵の乾隆『南詔野史』を参照した。

- (4) 『南詔野史会証』所引の『白古通紀浅述』にさらに詳しい内容が記されている。すなわち、白馬に乗った男は蒼山神で、三日間女を連れ去る。王は怒り、僧に命じて蒼山に鉄鎖をかけ、鉄の牛に引かせて蒼山を東海に沈めようとする。怖れをなした山神は、王に神珠を献じて許しを乞う。このように、仏教僧と山神との闘争および山神の敗北という内容から推測すれば、この説話は密教と密教伝来以前の宗教との闘争と仏教の勝利を反映していると思われる。それが趙魯氏の「望夫雲は南詔密教の最も盛んな頃に作られた」という説の根拠となっている。

- (5) 清康熙黄元治『大理府志』は、『重印大理府志』とも呼ばれている。『白族文学史』八九―九〇頁所引『重印大理府志』を訳出した。

- (6) 趙魯「神話之原始性及其相对独立性」一〇三頁によれば、洱海の東南部に広い岩場があり、その岩場は現在も石のラバと呼ばれている。

- (7) 李星華『白族民間故事伝説集』四八―五〇頁

- (8) 過偉「孟姜女伝説在壯、侗、毛難、佤族中的流伝和変異」『民間文学研究』創刊号 一九八三年一〇八―一一八頁

- (9) 巫瑞書『荆湘民間文学与楚文化』岳麓書社 一九九六年 九九―一〇六頁

- (10) 顧頡剛、鐘敬文『孟姜女故事論文集』中国民間文芸出版社 一九八四年 六一―六二頁

- (11) 趙櫓「〈望夫雲〉神話辨析」『山茶』一九八二年二期 二六一―二八頁

- (12) 袁珂「白族“望夫雲”神話闡釈」『思想戦線』一九九二年二期 四一―四三頁

さから身を守るための宝の衣を想起させる。

また、華南の地には明代中葉から末葉にかけて、各地に孟姜女廟が建設されている⁽¹⁰⁾。現在残る万里の長城は、そのほとんどが明代の修築である。明代にも多くの妻が、長城建設に赴く夫を見送り、その帰りを待ちわびたに違いない。孟姜女は秦始皇帝と対決した勇敢な女性とされているが、実は、孟姜女が対決した相手として人々が想定したのは始皇帝だけではなく、洪武から万暦までの明の皇帝たちでもあったのである。

四 東から西への伝播か

ここで、望夫雲についての先行研究を見ておきたい。

白族である趙櫓氏は望夫雲を神話として位置づけ、千年にわたり洱海周辺の白族に伝承されており、「精気が雲に化す」「精気が物に化す」モチーフが神髄であるとしている⁽¹¹⁾。

袁珂氏は趙櫓氏の論に賛同し、更に、望夫雲が楚文化、巫山神女神話の影響を受けていると指摘している⁽¹²⁾。

傅光宇、何永福は、望夫雲は南詔社会を背景とし、密教と巫教の闘争モチーフを備えているが、主題は恋愛悲劇である。楚文化を精神風土とし、安徽省から各地に伝播した「望夫」モチーフを吸収し、白族独自の文化と結びあわせて、作り上げられたものであるとしている⁽¹³⁾。

筆者も望夫雲は悲恋物語であると考えるが、唐代南詔のころから伝承されてきたとは考えにくい。明代以降に形作

られたと推測する。明代には、華南地域に広く孟姜女説話が伝承しており、その影響を受けて完成されたと考ええる。

白族の住む雲南は幾度か戦火に見舞われている。元代、フビライ軍の雲南侵攻により、遙々北方からやってきた軍人が雲南にとり残され、彼らとともに北方文化も雲南に残された。白族自身も戦に駆り出され、はるか西湖まで赴いている。軍隊の一部は雲南に帰ることを得たが、一部は転戦の後、故郷を遠く離れた地に止まらざるを得なかった。一九八〇年代、湖北省桑植県に所在が確認された白族は、なんとほるか元軍に対抗するため、南宋の都まで進軍した人々の末裔であるという。くしくも、湖南省桑植県はかつての澧州の一部、孟姜女を伝承している地域のまったただ中である。澧州の孟姜女と雲南の望夫雲を結びつけるのは空想が過ぎるであろうか。

おわりに

白族の近隣諸民族であるチベット・ビルマ語系の民族に山神崇拜が広く見られる。白族も同様に山神を信奉しており、民間伝承の中にも、山神が援助者の役割を帯びてしばしば登場する。また、白族の居住する大理盆地は、蒼山と洱海の間に位置し、風光明媚を誇る。そうした自然環境の中から、蒼山の玉帯雲、下関の風など、自然現象をもとにした数多くの物語が伝承されている。「望夫雲」はそうした白族に伝承されていた説話を基礎に、東から伝えられた要素を重ね合わせて作られていった、文化複合の所産と考

四 望夫モティーフと孟姜女

「望夫」モティーフを様々な形で見ていくうちに、思い浮かぶのは中国四大奇書の一つである「孟姜女」である。秦の始皇帝の長城建設に赴いた夫を妻は待ち続けるが、待ちきれずに夫を探す旅に出る。ついには長城の石垣を突き崩して、夫の骨を探し出すという物語である。これこそ「望夫」の最たるものであろう。漢籍文献に見た「望夫」も、孟姜女の記録と重なるものが少なくない。河北省山海関や遼寧省綏中県、興城県の望夫石や望夫山は、孟姜女が夫を望んだ所として記録されており、山上に孟姜女廟が建てられている所もある。「孟姜女」は漢族の説話として華北、華中に広く分布しているが、華南の諸民族の間にも伝承されている。

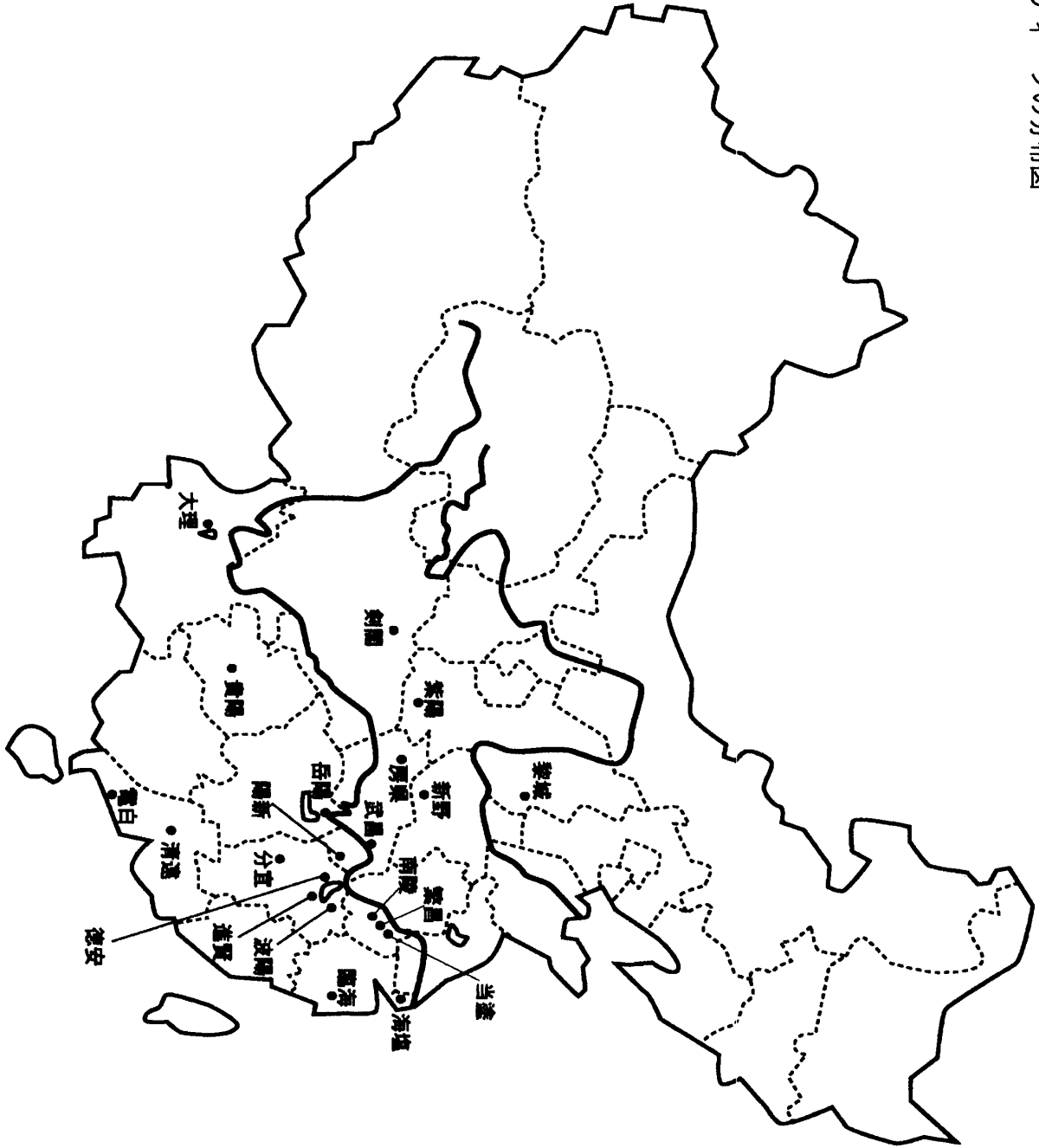
過偉氏によれば、広西壮族自治区に住む諸民族の伝承する孟姜女は、民族の風俗習慣、生活環境を取り込んでいるため、漢族の伝承と比較すると、物語の展開、主人公の性格付けなどに大きな違いが見られ、各民族の特徴が色濃く出されているばかりか、語りの場にも民族の独自性が示されているという。例えば、ムーラオ族の古歌の孟姜女は、全体の約半分が「望夫」を歌っており、婚礼の席で職業歌手によって歌われる。それは「望夫」の部分が人々に特に好まれるため、婚礼に集まった客たちへのもてなしであるとともに、新婦に聞かせ教育するためでもあるという。

湖南澧州にも孟姜女が広く伝承されている。明代弘治、

嘉靖年間、澧州の進士李如圭が孟姜女は湖南省澧州人であるという論文を著していることと関わりがある。澧州の孟姜女伝承の特徴も「望夫」に話の重点が置かれていることである。巫瑞書氏によればいくつかの類話があるようであるが、その中の一つ「望夫台」は、およそ次のような内容である。

夫の範郎が役人に連れ去られたのち、何の便りも届かない。孟姜女は夫の姿が見えないかと、家の二階から遠くを眺めるが何も見えない。家の近くの小高い岡から見ても同じである。そこで、あたりで一番高い嘉山に登り、山頂の大岩の上から、夫の去った北の方を眺めることにする。毎日登って眺めるうちに、岩に足跡と傘をついた跡が深々と刻まれる。いまでも岩の上にはつきりとついているそうだ。

孟姜女説話を中国の南北に分けて比較すると、北方に伝わる孟姜女は、主人公二人がどのように出逢ったかという話の発端に重点があり、そこが詳細に語られるが、華南に伝わる孟姜女は、発端よりむしろ望夫に重点が置かれていて、いかに夫を待ち望んだかを細かく伝えている。前述の岩に刻まれた足跡もそうであるし、夫を待ち望みながら、竹の葉に刺繍針を刺したため、竹の葉は細かく裂けてしまいい、以後繡竹とよばれるようになったなどである。また、夫の身を案じて、「寒衣」を送るモティーフは、白族の寒



である。「太平寰宇記」卷一〇五には、当塗県の西四十里に望夫山があることが記されている。

江西省

徳安県の西北の望夫山について「水経注」江水記載があり、「輿地紀勝」には軍役についた夫を待つて妻が毎日山に登ったが、登るたびに土を盛ったので望夫山と名が付いたとしている。「進賢県志」には鄱陽湖へ戦に赴いた夫を待つ妻が石と化したので望夫嶺と言うとなっている。晋干宝「搜神記」卷十一に鄱陽の西に望夫岡が有ることが記されている。これも、岡に登って夫を妻が待ったことから名が付いたとしている。鄱陽は現在の波陽である。「輿地紀勝」卷二八に、分宜県の西十里に望夫石があり、夫の帰りを待ち望んだ妻が石と化したとしている。

湖南省

「太平寰宇記」卷一一三所引「郡国志」に、巴陵の望夫山は昔夫人が夫を待ち望んで石と化したと記されている。巴陵は現在の岳陽である。

湖北省

房県の望夫山については「輿地紀勝」に記載があり、「太平御覧」卷四八所引陳顧野王「輿地志」には、菁山上に女性の形をした高さ三丈ほどの石があり、望夫石というたと記されている。菁山は陽新県の西南にある。「太平御覧」

卷八八八所引「列異伝」および卷四四〇所引「幽明録」には、武昌陽新県北の山上に望夫石があり、人が佇む姿に似ている。言い伝えでは、昔貞女が夫が国難により軍役に服するのを、子供とともに山の上から見送った。それが石と化したとしている。

河南、山西、陝西、広東、貴州、四川

明馮夢龍「情史類略」卷十一 情化類に、河南新野白河上に人のような石があり、望夫石という。これも戦に赴いた夫を待ち望んで妻がついに石になったとしている。山西省黎城の望夫山については「水経注」に漳水はまた望夫山を経る。山の南に人が佇む姿の石があるので望夫山というところ。『大漢和辞典』に陝西省紫陽県の南の水濱に望夫石があり、また、広東省電白県の東北に望夫山別名界山があると記している。『辞海』には、広東清遠県、貴州貴陽市にも望夫石のあることを記している。唐李林甫「元和郡県志」剣南道下普安県によれば、出征した夫を待つて妻は石と化したという。普安は現在の剣閣である。

以上はいずれも、軍役、商用などで遠方へ出かけた夫を妻が見送る、あるいは夫の帰りを待ちわびるうちに、妻は死に、化して山や石になっている。これらの中には妻が雲や風になった例はないが、長江の流れに沿うような形で「望夫」モチーフが広がっていることがよくわかる。

3 衣盗みのモティーフ

常人である王女は山の寒さに耐えることができない。どの望夫雲の話を見ても、王女のために防寒衣を盗むモティーフが必ず入っている。それが王女の提案か若者の発案によるかの違いはあっても、若者は必ず防寒衣を盗みに行く。防寒衣とは宝の袈裟または宝の衣のことで、湖の東にある羅荖寺の高僧の持ち物（あるいは王女の父の持ち物）とされる。衣はいとも簡単に盗むことができる。高僧が故意に衣を置き去りにして盗ませる話もある。すなわち、悲劇の結末を得るためには、防寒衣を盗み去るモティーフが不可欠となっているのである。

4 望夫雲の出現

夫の帰りを待ちつつ王女は死ぬが、その怨みが気となって空に昇り、望夫雲となる。さらにこの雲は恨みを晴らすために、風を起こして船を覆す。または、湖に沈んで岩と化した夫を一目みたいと、風を吹かせて湖の水を分けようとする。あるいは、風を吹かせて湖底の夫を湖から救い出そうとする。このように死して雲と化す説話は、雲南省の諸民族では白族を除いて、筆者の調べた限りでは見つけることができなかった。しかし、夫を待ちつつ何かに化身する女性であれば、各地で捜すことができる。

三 華南各地にみられる「望夫」モティーフ

「望夫雲」と共通する「望夫山」「望夫石」など、地域

や民族を問わず、中国には待ち続ける女性の話が多い。あるいは夫を待ち、あるいは子を待ち続けて月日がたち、失意のうちに死して山となり、石と化すのである。ここでは華南を中心とする各地の「望夫」モティーフと、分布地を調べることよって、白族の説話との関連を述べたい。漢籍文献に記された「望夫」モティーフは、浙江、安徽、広東、江西、湖南、湖北、河南、山西、陝西、貴州、四川に及んでいる。

浙江省

宋常棠『海塩澱水志』巻五の「望夫石」は、商用に出かけて帰らない夫を山の上に立って待つうちに、泣きながら死んだ女が石となった話である。また、『經典集林』輯本南朝佚名『臨海記』は、五龍山の稜線に女性が座った形をした大石がある。漁師の妻が夫の帰りを待ちわびて、子供を連れて山に登り石と化したと記している。

安徽省

『太平御覽』巻五二所引『輿地志』には、南陵県に女観山がある。昔夫が役人となって蜀に赴き、妻は山に登って夫の帰りを待つうちに石と化した。連れていた犬も石になったとある。南陵県は現在の繁昌県の西北である。『漢唐地理書鈔』輯本紀義『宣城記』および『太平御覽』巻四六「望夫山」は、楚の国に行つたまま帰らぬ夫を山の上で待つうちに石になった妻の話である。宣城は現在の南陵の東

ば寒さをはらうことができると知って、衣を盗みに行く。首尾良く衣を手に入れて湖の上を飛んで帰るとき、寺の和尚がそれと気づいて、木こりめがけて禪杖を投げつける。杖は木こりに命中し、木こりは湖の底へ落ち、たちまち石のらばに姿を変えてしまう。

王女は木こりの帰りを待ちわびるが、飢えと寒さのため、洞窟で死んでしまう。王女の恨みはまっすぐ空に昇っていき、白い雲となって玉局峰の上を漂い流れる。これが望夫雲である。冬この雲が姿を現すと、強風が吹きはじめ、湖の底のらばが鳴きだす。人々は、こんな時湖に船を出すと、王女の恨みで船が覆されると言い伝えている。

この物語は、一九五七年に大理で採集されたものであるが、細部にいたるまで「大理縣志稿」の記載と非常によく似ている。望夫雲伝承はその多くが大理地区を中心に語り継がれているが、洱源、鶴慶などの地でも若干採録されている。筆者の入手した資料をもとに、大理を中心に口頭で伝承されている「望夫雲」の構成要素を整理することにした。

1 主人公について

女性の主人公は、南詔王の娘または白王の娘として語られることが最も多い。少数ながら村娘、大理提督の娘あるいは蒼山の白狐が変身した娘とするものもある。

夫となる男性の方は、ほとんどが木こりとして登場するが、狩人の場合も多い。猿の王が木こりに変身して王女に近づく話、高山に住む白馬の將軍、王宮で労役に服す若者、書生などが主人公となる話もあるが数は少ない。いずれにせよ、多くに共通しているのは、山で生計をたてるなど、山と密接な関わりを持つ若者ということである。

しかも、若者は何らかの特殊な能力を備えている。例えば、腋の下から翼が生えて空を飛ぶ。何かを口に含んで空を飛ぶ。術を使つて変身する。飛ぶように走ることができるといった能力は若者にもともと備わっている場合もあるが、ほとんどが山神（蒼山神）あるいは山神を連想する老人から授けられている。

2 出逢いから逃走

二人の出逢いの場合は、祭りの帰りの森の中や、寺詣りの帰り道、あるいは山の麓、王宮の花園などである。白族には三日にわたつて山林を巡り歩く祭りがあり、寺も多くは蒼山の麓に建てられている。出逢いの場も山と関連が深い。

二人は父王の強い反対にあう。そこで若者は異能を発揮して空を飛ぶ（あるいは飛ぶように走る）。このとき必ず王女を背負つて飛んでいく。自分の領域である蒼山の玉局峰奥の洞に王女を連れ去る。山での二人の生活は若者の献身的な努力に支えられ、幸せに過ぎていく。

が、「大理縣志稿」である。

世人の言い伝えによれば、蒙氏の時、怪が宮中より王女を連れ去り、玉局峯に暮らした。怪は王女の欲しがる飲食物を絶えず与えた。高山のため非常に寒く、王女には苦痛だった。怪は衣を探し求めることにして、王女を慰めて言った「河東の高僧が一枚の袈裟を持っており、身につければ夏涼しく冬暖かい。これを取ってこよう」と。夜になると洱河の東にある羅筌寺に至り、袈裟を盗み出した。僧がこれに気づいて、呪文により圧した。怪は寺の西の水中で溺死して、大きな岩と化した。人々はこれを石のラバと呼んでいる。王女は待つが夫は帰らないため、憂いのうちに死んで精気が雲となる。名を望夫雲と言う。毎年冬に雲が現れると、大風が吹き狂い、海中の石を吹き出すまでその勢いは止まることがない。湖を渡航する者はみなこれに苦しむ。〔大理縣志稿〕卷三十一 雑志部 古蹟

主人公の男について山神とは明記されていないが、「怪」であるということは、常人とはかけ離れた存在、あるいは常人にはない異能の持ち主ということであろう。男が王宮からつれてきた女のために、異能を発揮して防寒具を盗んだ結果、命を落とすことになるのは、康熙「大理府志」と同じである。「大理縣志稿」で初めて記されるモティーフの一つは、男が湖に落ちて岩となること。いま一つは、女

は男の帰りを待ちながら死ぬが、死んだ後も、岩となった夫を湖から救い出そうとして、強風を吹かせるという部分である。康熙「大理府志」では、女の無念さが形を変えて雲となり、恨みの強風を吹かせるというところで終了しているが、「大理縣志稿」では話の筋道に理論的裏付けが更に加わり、男を救い出したいという女の一念が強風を吹かせるのだという説明が付け加えられている。

蒼山玉局峰上の雲と洱海に起こる強風と大波のかかわりについて、漢籍文献の記載の変遷を見てきた。そこに記されたモティーフは、口頭で伝承されてきた「望夫雲」にも受け継がれていることは言うまでもない。

二 口頭伝承による望夫雲

白族が口頭で伝承している「望夫雲」について、一九五〇年代以降聞き取り調査が行われ、複数の話が報告されている。その中から一話を選んで、梗概を左に記す。

南詔王女は夕べのそぞろ歩きの途中木こりの若者と出会い、たがいに好意を持つようになる。それを知った南詔王は腹を立て、寵臣と王女の結婚をとりきめてしまう。王女は王宮を抜けだし、木こりに事の次第を告げると、木こりは王女を背負って空を飛び、蒼山玉局峰の洞窟へ逃げ込む。二人はそこで仲睦まじく暮らすが、やがて冬が訪れ、王女は洞窟の寒さに耐えられない。木こりは、湖の東の寺にある宝衣を身にまとい

「望夫雲」の名がすでにあって、それに龍説話を付会させたと考えた方が自然であろう。

以上のごとく、玉局峰上の雲と洱海におこる強風と波について、嘉靖「大理府志」と康熙「述異記」には、自然現象または龍が原因で引き起こされたものとして記されている。

さて、蒼山にかかわる話で、自然現象でもなく、龍でもない、山神と南詔王女の話を書いているのが、「南詔野史」である。⁽³⁾

晟豊佑の娘が崇真寺に詣でた。帰りに城西まで来たとき、白馬に乗った人が娘を連れ去っていった。行方を捜したがわからなかった。王は僧に尋ねた。替陀が言うには「これは山神の仕業です」そこで灯を設けて照らすと、果たして山の下にいた。僧は怒り、法を行って山を河まで移そうとした。神は俱れ、宝珠を献じた。王はこれに従った。

南詔王女が何者かに連れ去られるところから始まるこの話は、ドラマティックではあるが、愛の物語としての展開はない。むしろ話の重点は後半部にあつて、山神に代表される土着宗教を仏教が屈服させた話、と解釈した方が理解しやすいであろう。⁽⁴⁾

「望夫雲」の由来譚が悲恋物語として記録されたのは、康熙「大理府志」である。⁽⁵⁾

俗伝によれば、昔ある貧しい人が蒼山神に出逢い、異術を授かった。すると忽然として肉羽が生じ、飛ぶことができた。ある日、南詔宮に至り、南詔王の娘を連れ去ると、玉局峰で夫婦となった。飲食に必要な具はみなこの人が揃えた。のちに王女に不都合はないかと聞くと、王女は非常に寒いと答えた。その人は河東の高僧が七宝の袈裟を持っていると聞いて、飛んで取りに行った。その帰り、僧がこれを知り法力で制したため、ついには水中に溺死した。王女は夫を待ち望むが、帰らないので憂えて死んだ。その精気は雲と化し、突然わき起こり、突然消えた。あたかも遠くを望み見るようである。この雲が洱河に起こると、呼応する雲が現れる。狂風が吹き、舟を出すことができない。そのため望夫雲と呼ぶ。また無渡雲とも呼ぶ。

(康熙「大理府志」精気化雲)

この話のモチーフをあげると、①男が山神から術を授かる。②王宮から女を連れ去る。③局峰で夫婦となる。④女のために防寒衣を盗む。⑤高僧によって男は湖へ落とされ死ぬ。⑥女は男を待ちながら息絶える。⑦女の怨念が雲となり、強風をおこす。

康熙「大理府志」に至って、初めて悲恋物語としての「望夫雲」が完成したといえる。これらのモチーフを見ると、前述した漢籍文献に記載された断片のそれぞれが、「望夫雲」説話の成り立ちに何らかの関わりを持っていることがわかる。「大理府志」の内容をさらに詳細にしたの

ここでは玉局峰の上に雲が現れると、湖に大波が立って船も出せないということが、単なる自然現象として記されているだけで、雲の由来についての記述はない。雲の名も「無渡雲」と記され、「望夫雲」の文字は見あたらない。同じく嘉靖「大理府志」に、大風をおこして船を覆す龍の話がある。

邪龍はすでに大士によって除かれたが、その遺類はなお東山の海窟に潜み、狂風をおこし悪浪をたて、時には舟を覆す。一人の神僧が東崖に羅荃寺を建てたが、狂風悪浪を嫌い、経を誦した。ある夜、突然大きな震動声が聞こえた。僧が叫ぶと、百余の童子が見えた。童子が言うには、「師はここに寺を建て、我らの家を壊したため、我らは落ち着くことができない。師よどうか寺を別の場所に移してください」。僧は厳かに言った「これは仏法が法位にあるのだ。なぜ不都合なことがあろうか」と。そこで童子は姿を消した。翌日、寺の下に百余の死んだ蟻が浮かび漂った。以後浪は静まり、僧もその後この世を去った。

（嘉靖「大理府志」卷二 山川）

これは高僧の邪龍退治説話と考えられる。邪龍について、原文には「一名羅刹」という注がつけられている。このことから、雲南在住の研究者は、この邪龍とは羅刹のことを指しており、仏教伝来以前から信仰されていた土着宗教の

象徴である。したがって土着宗教と仏教との葛藤を示す説話としてこの物語は解釈できると述べている。いずれにせよ、ここでも「望夫雲」の名は示されていない。

「望夫雲」の名が記載されるのは、清康熙東軒主人の「述異記」である。この中でも雲の起こる原因は龍と結びつけられている。

趙州には洱海があり、土地の人が大理府に詣るときは、必ず洱海を経由しなければならぬ。しかし風波が激しいため、いささか命を惜しむことを知る者はみな陸をとった。その海中に望夫雲が起こると、ますます船を出そうとはしない。伝えによれば、孽龍が海の中央に鎮まり、その雌は蒼山に居る。二龍が会おうとする時は、蒼山に雲が起こる。雲は階段のように山をめぐること二十里、海中に至って止まる。その日は強風が木を抜き、屋舎にはみなざわざわという音が聞こえる。天上の雲を凝視すると、雲はほとんど移動していないいうえ、大きさや濃淡の差もない。まことに怪事である。

（清康熙間東軒主人「述異記」卷下）

記載のなかに「望夫雲」という文字はあるものの、龍とのつながりが唐突である。水中の孽龍が雄で、山中の龍が雌、雌雄の龍は夫婦であり、妻が夫を恋慕う時に出現する雲だから「望夫雲」と命名されたということであろうか。しかし、この解釈では無理があるように思われる。むしろ

望夫雲伝承

—その成立過程をめぐって—

新 島 翠

An Analysis to Understand the “Waiting for the Husband Cloud” Tradition of the Bai People

Midori Niijima

The Bai people of Yunnan Province in China have many beautiful traditions. The “Waiting for Husband Cloud” is very famous among them. Some scholars say that the tradition originated in the Tang Dynasty, when the Bai people had their own kingdom known as Nanzhao. The story has been passed down from generation to generation in both written and oral accounts. In this paper I review the research of Chinese scholars, and examine the process through which the “Waiting for the Husband Cloud” tradition developed.

Key words

Bai people, China, Chinese ethnography, Chinese minorities, legends, Mengjiangnü, Nanzhao, traditions

はじめに

大理蒼山の山腹に、細い雲がまるで帯のようにたなびくさまは、例えようもなく美しい。古来この雲は玉帯雲と呼ばれ、観音菩薩が降臨する際現れると伝えられてきた。同じく蒼山にかかる雲ながら、人々から恐れられているのが望夫雲である。無渡雲ともいわれ、玉局峰の頂に笠雲のように姿を現すや、たちまち強風が吹き荒れ、洱海が波立ち、船を覆すというのである。望夫雲には、唐代南詔の頃から伝承とされる由来譚がある。その由来譚は古くより文献に記録されているだけでなく、口頭によっても今日まで数多く伝えられている。筆者が現地で調査した折も、白族の人々が愛着を持って物語るのを耳にすることができた。こうした望夫雲伝承について、中国における研究成果を紹介するとともに、発生年代、文化的背景などについて、筆者の見解を述べてみたい。

— 漢籍文献にみる望夫雲

蒼山にかかる雲についての古い記録は、嘉靖『大理府志』に見ることができる¹⁾。

無渡雲、玉局峯上にこの雲が現れる時、海浪は空に
とどき、人々は渡ることができない。

(李元陽嘉靖『大理府志』卷二 古跡)